

## 近代の福祉に生きた女性パイオニア (その3)

— フローレンス・ナイチンゲールとジェーン・アダムス —

鈴木 真理子

### Women Pioneers Who Lived for Modern Social Work (3)

— Florence Nightingale and Jane Adams —

Mariko SUZUKI

#### 第2章 多感な少女時代と将来への夢

Most young people have an identity crisis during their adolescence because they want to clarify what they are, what they should do in their own lives and in which way they should advance. These are the hurdles of adolescence in today's modern times. When Nightingale and Adams lived, upper and middle class women didn't have a job nor goal of life. Only lower class women worked as a maid, laundress, cleaning woman, sales woman and baby-sitter, for their living.

Our two heroines each experienced their identity crisis mainly by their family conflict and instability without goal of life. Their crisis appeared as a neurosis or a chronic disease, but they found their own vocation after the journey around the Europe with their families. Nightingale who had determined to be a nurse found the nursing practice school in Germany, Adams who had been shocked by miserable poor people in London slums chose to make a settlement movement in American slums.

Two heroines have some common characteristics as a good writer, as a single rich ladies, and as a patient pioneer in social work. But in the their studies they also had quite different ways. Nightingale acquired the knowledge only from her private teacher and her father, Adams spent active life at college as a boarding student. At the end of their twenty's, they found their lifework at last and began to walk their first step in the real world.

#### 1 若き日の葛藤と勉学への道

— 家族との軋轢、そして神の召命 —

古来多くの聖人、英雄、予言者が何者かの声を聞いて地位財産を捨てて出家した。ある者は未開の地に伝道の旅に出て迫害にあつて殉死し、ある者は血みどろの戦いの末、反逆者として処刑された。逆に運命の女神が味方すれば、国家統一を成し遂げて王となる者も

あつた。このような征服者や聖職者でなくとも、宗教的活動、社会事業に身を投じた多くの偉人が、この神の召される声“啓示”を聞くという。仏教では仏の御心に従う悟りの境地、キリスト教では召命と呼ばれる。それぞれの宗教の帰依者はそれぞれ信じる神の采配を受け入れ、秘蹟として柔順に従う。また宗教の力でなくとも、希有な体験、究極の恐怖に直面するような極限状況、臨死体験、至高体験により神秘的精神の恍惚

状態により、我執や利己心を捨て、生きる目的や人生の方向転換をする。<sup>1)</sup>これは則天去私、禪の修業の悟り、無の境地にも通じる。すぐれた精神の持ち主が我を捨て超自然と人類の本能の声を聞いた時、これを神の声というのかもしれない。<sup>2)</sup>

ジェーン・アダムスは幼少期、父親を通してアメリカの理想、民主主義と正義に殉じる精神を受け継いでいるが、神秘的宗教体験とはかなり趣を異にする。父親はキリスト教としてクエーカー教を自分の生きる規範として選んでいたが、彼女自身は女学校でプロテスタントの厳格な教育に柔順ではあっても、伝道者になることは本望ではないと最後まで固辞した。後のセツルメント活動を通じて社会主義も受け入れていく柔軟さから、キリスト教を一つの人間愛、博愛主義の一形態として位置づけている印象を受ける。アメリカの開拓直後の建設と繁栄の時代は宗教的神秘には縁遠く、アダムスの宗教観はより現実的でダイナミックな生命力を包含し、束縛や閉鎖的なものではなく、より開放的宗教であった。

一方ナイチンゲールの家系は、多くのイギリス上流階級がそうであるようイギリス国教<sup>3)</sup>であった。キリスト教の中でも歴史が古く、修道院での隠遁、瞑想など神秘的傾向が強いカソリックとは多少趣を異にする。しかもナイチンゲール一家が格別宗教活動に熱心とか敬謙とか、フローレンス個人が宗教的傾倒が強いとはほとんどの伝記に語られていない。にもかかわらず1837年2月7日の運命の日、17歳のフローレンスは神のお告げを聞く。

「神は私に語りかけ、神につかえなさいとお召しになった」しかし何をすべきかの指示はなかった。そこで人知れず何をしたら神の意志に添うことになるのか、必死に思いを巡らすのであった。<sup>4)</sup>

#### — 思春期のアイデンティティ拡散 —

そのころのフローレンスは、前章で述べたように思春期の自我同一性拡散の真っ只中、人格的タイプとして全く正反対の母や姉との葛藤から、次第に部屋に閉じこもりがちの孤独な精神状況にあった。その孤独を癒したのは、読書や算術などの勉強の他、少女の頃からの毎日つけていた日記であった。毎晩静かに机に向かって内省するように自分の悩みを、心の中の神の存在に打ち明け、対話し癒していたと思われる。ある程度自分の道を歩み始めてなら神の召命にも心の準備も

できるだろう。しかしまだ自己が何者であるかもつかめないまま、日々の家族関係も全く不如意の状態、神の召命を受けたのであるから、生きることがより負担にさえなった。何をすべきかうろたえ、進むべき道に迷い、一層悩みが深まったのではなからうか。家族の中で母の期待に応えにくい自分とその自分に味方する父親、それに相対する母親と姉、相性と価値観から真っ二つに分断された家族の狭間で、葛藤は増すばかりであった。

両親も、はでで社交好きな妻と地味で実務的な夫、早く言えば性格の相違、タイプが違う。現代の小さな家で鼻を突き合わせなければならない核家族夫婦なら、すぐに離婚にいたったかもしれない性格の不一致も、当時の上流家庭では屋敷も田舎とロンドンでそれぞれに別居し、互いに違った交遊関係、趣味、気晴らしで十分夫婦を維持することは可能であった。現代で言う家庭内離婚も富と環境のおかげで、洗練され保持されたわけだ。しかし情緒的には何かぎくしゃくと軋むものがある。それが兄弟の中で人一倍感受性のするどい子供の身体症状となって表現されるという家族病理<sup>5)</sup>が、まさにフローレンスの思春期の神経症ではないかとも推測できる。

現代での家族病理とは、家族メンバーの歪みに敏感な子供、自己を主張できない弱いメンバーに限って登校拒否などの問題行動や心身症として信号を発するものだが、核家族が普及する近代以降、多くの精神科医によりその症例が様々報告されている。特にナイチンゲールの育ったビクトリア朝以後、女性らしいさが豊饒と健康美からきゃしゃでよわよわしい依存的存在に移行するのに併せて、拒食症やヒステリーなどが上流家庭の子女に表れている。<sup>6)</sup>上流階級の閉鎖性と労働と生活苦の緊張がない逼塞感が、一層自我の拡散傾向を助長する。ウイーンのプロイト<sup>7)</sup>はそのような上流階級の若き女性に見られる様々なヒステリー、ノイローゼの奇異な症例を報告して、精神分析を一躍ヨーロッパの市民社会に広げたのである。

ナイチンゲールの両親は、かわいい娘の閉じこもりがち傾向を心配し、何か気晴らしになるものかと思いを巡らした。そこで、新婚の頃のかつての楽しい思い出である、欧州旅行を計画した。それは社交界で活躍するであろう二人の娘のデビューにパリ社交会での最後の磨きをかけるためであり、ヨーロッパの上流家庭との親交も目的であった。また留守を利用して二人

の娘のために家の格式を一層上げるため、エンブリー館の拡張と大改造も計画されていた。

### — 新しい家族との葛藤 —

一方アダムスにも青春のアイデンティティ・クライシスに陥った時期があったようだ。家庭内葛藤の最大の要因としては、継母と新しい家族がある。父親は母親が死んで6年間独身を通したが、同じ町の2人の息子のいるアンナ・ハルデマンと再婚したため、アダムス家にも大きな変化が訪れる。継母はピアノを弾き音楽を好み、父親のジョンとともに、図書館や地域の文化の振興に貢献するなど、洗練された教養ある女性であった。しかし、それまでの母親のいない奔放な子供達に、きちんとした躰を施そうとやっきとなるあまり、厳しさを強いて、ただでも父親を取られた寂しさと恨みの募るジェニーはあまりなつかなかった。しかし父親と多少距離ができ、18歳の知性ある医者の子の兄と同じ年の弟という、義理の兄弟ができたことは、アダムスの青春に大きな変化を与えた。

弟のジョージはジェニーより半年年下の創造力のある冒険家で、物静かなジェニーを野原や川に連れ出し、活発な運動と子供らしい冒険といったずらの楽しさを教えた。それまで物静かで読書と思索を好んだジェニーのほおに赤みがさし、食欲と体力、そして男子のような議論と科学的興味が芽生えた。このジョージとは女学校時代も休暇には一緒に生物、鳥や動物の観察をしたり、ダーウィンの進化論を議論したり、近かった寄宿学校では互いの学友たちと共にハイキングにでかけたり、青春の楽しさを味わえる良き仲間であった。アダムスが後に医学校に進学した影響は、自分の幼い頃の病気も動機であるが、この兄弟に多分に影響されている。

年齢の離れていた一番上の姉は結婚して早く家を出ており、実兄はあまりできが良くなく、後独立して家庭をもったが、精神病に倒れ早く亡くなった。残された家族すべての面倒をアダムスが見たが、父親以外の血のつながった家族との縁は薄かった。しかしこの兄が残した遺児には、結婚しなかったアダムスは数少ない身内としての深い情を感じ、ハルハウスに引き取り養育、学費の面倒など後見した。しかしその甥も第一次大戦のフランスで戦死し、婦人平和運動の戦争視察においてその墓を発見し、重い心で詣でたことを記している。<sup>8)</sup>

勉学のチャンスと行動範囲の広さから言えば、ナイチンゲールよりはアダムスの方が恵まれていた。厳しい規則づくめの質素な寄宿生活といえども、ナイチンゲールの家庭教師と父親による閉鎖的、個人的教育よりよほど活気あふれるものだった。気にそまない継母のいる家庭より寄宿学校での親の監視を離れての同じ年頃の仲間との共同生活は、どれほど自立と刺激を与えてくれたか知れない。東部のスミス・カレッジ進学への希望は適わなかったものの、アダムスは父親が理事をしているミシシッピ流域の女子高等教育として一番古く格式のあるロックフォード神学校に入学した。教育の内容はラテン語、ギリシャ語、キリスト教の教義の他、伝道師として必要な生活と精神の自立などであった。掃除から食事まで自炊で、将来の後進国へ赴く伝道師の育成のため、教育方針は質実剛健を重んじる厳しいものであったが、不思議に弱かった体も健康で通した。そしてここで弁論や論述など自らの多くの才能に開眼し、活潑な行動力と才気煥発な同性の多くの終生の友を得ることができた。特に後のセツルメント事業で人生の大半を共に歩み支えられたエレン・ゲイト・スターと深い親交を結んだ。エレンは小さな商店主の娘で、細みの地味な性格で絵がうまく芸術に造詣が深く、ハルハウスでも絵画教室、芸術クラブ、画廊などの創設に力を注いだ。

## 2 青春の魂の漂流、病い、欧州旅行

### — 伝道師より実践的社会活動を —

アダムスは自伝の中で、一抹の悔恨をもって学生時代に経済学を学ばなかったことを記している。「私達は精神・道徳哲学を苦勞して学んだが、それは教室の中では実に無味乾燥なものであった。」<sup>9)</sup>しかしグループでの文学や歴史の講読に陶醉し、自然科学と冒険的試みでアヘンを集団で吸ってみたり、詩の朗読、仲間との議論、弁論大会での雄弁の訓練など、教室外では知的興奮を満喫した学生生活であった。卒業生の大半が伝道師やその妻となり、世界に散っていくのがロックフォードの歴史的伝統であったが、アダムスは信仰的態度はもち続けながら、若い純粹さや情緒に訴える誘いには4年間拒み通した。神学校で優秀であった生徒アダムスでも、ミッションになれという神の声は聞こえなかったようだ。むしろ本人は自然科学や文学に興味をもち、医学校に進学し医者になるか、または校

内誌の編集に活躍しており、作家になりたい夢をもっていた。

「あるものは伝道師として日本に行き、イギリス人やアメリカ人のための学校を経営している。他のものは医療伝道師として韓国にわたり、女王の病気を治して宮廷医となり、外交的にも重要な役割を果し、またあるものは数少ない盲学校の熟練者となり、またあるものは民衆に本をという図書館運動の開拓者となっている。この若き日の友人たちが行っている努力は、形こそ異なっているが、本質的には私と、同じものであることを示しているのである」<sup>10)</sup>後ハルハウスにて自分のセツルメント事業を振り返った時、かつての友人の伝道師たちが後進国で行った活動と本質的に同じことに気付いたのである。かつてあれだけ拒んだのに結局同じようなことをしている。なんという奇しき偶然か。これこそ人知の及ばない神の采配ではなからうか。

トルコへの伝道師の勧誘には興味を感じたものの、アダムス自身は宗教活動を前面に出したのものより、知識と労働に宗教心が結び付いている活動を、自分の進むべき道であると信念を固めていた。聖書の教義やイデオロギーの主義主張だけで人を説得する限界をよく見極めていた。行動の伴わない思想と主義の空しさを、子供のころの父とリンカーンの生き方から学んでいたと言える。ここに子供の直感的吸収力の偉大さを見ることが出来る。

ロックフォード神学校卒業論文では「少なくとも自然科学の一分野を研究すれば、女性は正確さと知性を身につけることができ…(中略)…真実を見いだすべく訓練された目ですべての自己欺瞞や幻想を見破り、独断的でない自己を表現できる方法を習得できる。」<sup>11)</sup>と朗々と女性の可能性について述べる真の意味のフェミニストであった。しかしいくら女性選挙権を主張しようとも、『パン焼く人』というエッセイで「この時代の女性は、男性もしくは男性のようにになりたいと思っているのではなく、ただ自立して思考し行動する権利を有したいのだ」と主張し、やや保守的な女権拡張論者であることを示している。伝統的女性像の良き面を認識し、行動と実生活の裏付けのない、声高の真新しい主義主張の空しさを直感的に知っていたと言えよう。

#### 一 父の死と卒業後の指針喪失期 —

このような高邁な理想と夢に溢れていたきらきらする学生時代が終わってみると、仲間から注目され自己

確信に満ちていたアダムスにも大きな不幸が見舞う。自宅に戻ると以前の脊椎の病気が再発、自宅療養を余儀なくされる。そして久し振りの家族団欒を両親と過ごしたのもつかの間、父親は自分の鉱山を視察に出掛けた途中、腹膜炎を発病し、手遅れで旅先であっけなく亡くなってしまう。自分の存在の基盤であった父をなくしたショックは、アダムスにとって大変大きなものであった。親友エレンに「経験のない絶望、いつ正気を取り戻すことができるのでしょうか」と訴えるほど、喪失感に打ちのめされた。あれほど少女期、父親への憧れを語っていたアダムスであるから、21歳で父親の死に直面した悲しみは絶望としか言いようがなかったであろう。しかし壮年期に綴った自叙伝である「ハルハウスの20年」には、父親喪失の絶望についてはほとんど語られていない。わずかに自分の仕事の集大成として「わが父の霊に捧ぐ」と献辞が書かれており、「ハルハウス」の社会事業を通じて、父の死の悲しみを立派に乗り越えた経過が窺える。

アダムスは父の死の絶望にいつまでも沈んではいられなかった。残された多くの財産処理があったのだ。多角的に事業を経営していた父親の遺産は莫大で、アダムス夫人と子供達でわけてもなお巨額で、アダムスは若くして数すくない裕福な淑女になった。しかしその運用、管理の煩雑さと複雑さで、慣れないアダムスには多くの時間とエネルギーを要し、最初は愚痴の種だった。どうにかショックから再起し、財産の運営も軌道にのり、最初の計画どおり、フィラデルフィアの子医学校に入学する。

フィラデルフィアのような都会はアダムスにとっては全く初体験であり、学業復帰の反動で持前の熱心さで勉学に没頭した。おまけに社交界での気晴らしを求め、フィラデルフィアに出てきていた義母に振り回され、また過労で病気が再発するという打撃を被る。アダムス未亡人は、娘を上流社会に売り込もうと夜の社交に毎晩のように連れ出したのだった。これも世代の価値観の相違であろう。古い時代の価値観で生きてきた義母にしてみれば、上流の紳士が集まる社交会で、魅力と力ある男性を射止めるのが女性の幸せであった。自立に目覚めた娘の価値観とは全く相違し、世代間の断絶が多くの無意味なエネルギーを消耗させる。いつの時代にも、結婚、学歴、仕事など過去の価値観と新しい世代の価値観の葛藤と相克が生まれる。アダムス、ナイチンゲール共に青春をその渦の中で過ごし、多く

のエネルギーを消耗した。

入院生活の後、姉の家で半年絶対安静で養生するが、主治医は勉学継続は無理と診断した。ちょうど医学に魅力を感じなくなっていたアダムスは医学校はきっぱりとやめ、保養がてらヨーロッパ旅行を勧める医者からのアドバイスにしたがった。過去からの新たな再出発を求めて、新大陸の自由の国から歴史あるヨーロッパ大陸に旅立ったのだ。

#### — 欧州旅行後の領地での看護活動 —

使用人を含む大所帯のナイチンゲール一家はロンドンを出発、フローレンスが生まれたフィレンツェにも滞在した。そのころ流行していオペラを堪能し、古い史跡、美術館などでルネッサンスの絵画彫刻の力づよさと優雅さに圧倒され、地中海の明るい太陽と海の匂いを十分吸い込み、ジュネーブを通過してパリについた。パリの社交界でも一家は夜会や茶会に毎日のように招待され、多くの知己を得たが、フローレンスは聡明なクラーク嬢に共通のものを感じ、親交を結んだ。彼女は後にメアリー・モール夫人となるが、二人は後々まで文通する心を許す友となる。旅行中フローレンスは常に日記に記録を欠かさず、旅行の行程、毎日の行動、町の印象、感じたことをノートに書き付けていたが、この習慣はクリミア戦争での看護記録、病院改善の報告書などに活かされる。この旅行でフローレンスは、久し振りに解放感を味わい、持前の探求心と観察眼で多くの自然や社会状況、人や町の暮し、風物など見聞を広め、後々の野戦病院改革、看護学校設立に役立つ実学的知識を蓄積習得したのであった。

ナイチンゲールが19歳になって、一家はイギリスに帰国するが、エンブリー館は未だ完成しておらず、できるまでロンドンのホテルに滞在することになる。そこからフローレンスは早速パリのメアリー嬢にホテルでの華やかな社交生活のこと、ロンドンの政治の様子などを書き送っている。ロンドン社交界に華々しくデビューしたフローレンスは、ビクトリア女王に謁見する機会にも恵まれた。そのころの若き姿を留めたスケッチには、華やかな美人というより、清楚で聡明さを漂わせた品格が溢れている。改築が完成した豪勢なエンブリー館では、毎日のように舞踏会や茶会が催され、ロンドン社交会の多くの着飾った紳士淑女が大勢つめかけた。イタリア旅行の変化により元気を取り戻していたフローレンスは、夏のリーハーストでの生活や新

しいエンブリー館での来客を迎えての社交生活にも表面上は合わせていた。若者たちの劇を演出してみたり、その隠れていた統率力、企画力を発揮して、青春の充実感を味わっていてもいた。父親の設計による重厚で堅固な館は、現代でもエンブリー・パークス・ハイスクールとして使用され、往年の栄華を偲ばせている。

ナイチンゲールは二つの館を季節ごとに行き来し、領地の村の貧困者の慰問や病人を見舞って、看護のまね事をするのが何よりの慰めになっていた。家族には変わり者に見られても、リーハーストの村の病人や怪我人の面倒、看護の指導がそれなりに村人から信頼を受け、自分自身も看護の仕事に充実感を感じ始めたころ、秋がきてエンブリーに戻らねばならない時の後髪を引かれる思いをこう日記に記している。「私はリーハーストを離れるのがしのびない。あんなに仕事が残っているのに。私はあそこで一生、毎日毎日、病人たちの世話を仕事をしていても少しも不服はない。あの病人たちは来年の夏、私がリーハーストに戻ったら死んでいるだろう。私はもう二度とあうことのできない、気のどくな友人たちをあんなに大勢、リーハーストに残してきてしまった。あの人たちにしてあげることがたくさんあったのに…（後略）」<sup>12)</sup>

そのころの村の衛生状態や病気への無知を嘆き「この夏、私は目の前で貧しい女の人が死んでいくのを見ました。それというのも病人に付き添う人に一人も病気について知識のある人がいないからです。あれでは病人に有毒なひ素を飲ませるのと同じくらい、病人を毒しているのです」また子供に一度に多くの食事を与えようとする母親、小さな5歳ほどの女の子が乳幼児の弟の世話を任されて危なげな様子など『看護覚書』にも記されている。

そのように身近に手の施されていない遅れた状況を改善したいと熱望する一方、自分に何も専門的な知識がないことも、手に余る重病人、死んでいくのをただ手をこまねいて見ているしかないいらだちの経験を重ねるたびに、看護の専門的勉強をしたいという希望が心の底にふつふつとわいてくるのだった。

### 3 自分の社会的使命の模索期

#### — 看護婦志願のレディ —

看護を学びたいという夢が、ひそかにナイチンゲールの胸に芽生えた。その思いは強まるものの、その時

代や上流社会の習慣から職業を持ちたいなど、ましてやそれが看護婦であるなどとは、とても家族に打ち明けられなかった。というのは、そのころのイギリスの看護婦は、専門職どころか女中以下の身分であり、公立病院の看護婦、教会付属の病院看護婦いずれも女性として最下位の職業だった。

当時のタイムズ紙には「貧しい女が2、3人の子供を抱えて未亡人になる。彼女はどうかすればいいか。針仕事では食べていけない。メイドの仕事には向いてない。日雇いの掃除をさせてくれる知り合いもない。洗濯ものの仕上げのためのしわのぼしロールを買う金もない。そこで彼女は牧師の推薦で病院の雇われ看護婦になる」という記事が、そのころの看護婦のイメージを伝えている。その時代の市井にうごめくように生きている、貧困層の生態を達者な筆で赤裸々に描いて市民層にショックを与えた社会派の作家チャールズ・ディケンズは<sup>19</sup>、1844年の作品『マーチン・チャイルズウィット』で二人の看護婦を登場させ、ふしだらで酒びたりの現実の看護婦の有り様をセンセーショナルに描いて、人の命を救うべき看護婦がこんなことで良いのかと社会の批判を喚起していた。

そんなわけでナイチンゲールの家族は、本人が看護の仕事に興味をもっていることで世間一般の若い女性よりかなり変わり者であると承知はするものの、看護婦の職につくことを許すなど言語道断であった。「そのころの看護婦には使命感どころか、一人の女性が看護婦になる条件は簡単な、失恋、失意、厭世、または他に何も能がないというだけで十分であった。」<sup>19</sup>「英国においては女性の労働の道は少なく狭い、そして人が溢れている。ロンドンのような大都市では公然と身を売って生きている女性も大勢いた。また昼間は労働に従事し、夜になると罪を犯すというおぞましい中間地帯をさまよっている女性も大勢いる。…(中略)…職の不足、不十分な賃金、保護と抑制の欠如などが原因になっている。」<sup>19</sup>ナイチンゲール自身、それをよく理解していた。

ビクトリア朝時代の経済の大発展をみたロンドンでは、下層階級の女性には売り子、店、工場の労働者、洗濯女、掃除夫、住み込み女中など多様な賃仕事があった。しかし、中流階級の女性には家業の手伝いぐらいしか、その教養にふさわしい仕事はほとんどなかった。ちょうど近代家族として大家族から核家族に移行し、恋愛結婚が増加し、家庭内での男性と女性の役割分担

が上流から労働者階級に及んでいく過渡期でもあり、中流家庭の女性は、家政や育児を一手に引き受け、かえって家庭の中に囲い込まれてしまう時代であった。このような家族を近代家族と社会学では呼ぶ。専門職につけるのはほんの一部の教育の高い者や才能に恵まれた少数の女性で、中流の女性の代表的職業は上流家庭の住み込み家庭教師か、寄宿学校などの教師であった。「ジェーン・エア」の作者、シャルロット・ブロンテ<sup>16</sup>「若草物語」のルイ・ザ・メイ・オルコット<sup>17</sup>、「赤毛のアン」のモンゴメリー<sup>18</sup>など、このころの英米女流文学のほとんどがこの境遇の女性によって、または家庭教師をヒロインに描いている。また結婚は上流ほど晩婚化の傾向で、女性が30歳、男性はそれ以上であった。

そして上流社会における女性は、持参金をもって裕福な階級の紳士と結婚して、仕事や労働とは無縁の社交と享楽的生活をおくることが多くの上流婦人のライフパターンであった。フローレンスの母親がそうであったように、両親は二人の娘にもできるだけ裕福で優しい夫を見付け、一生安泰で幸せな生活をと願った。そのためよい結婚相手に巡り会えるチャンスとなる夜会を頻繁に催し、二人の年頃の令嬢を目当てに、実際多くの若き紳士がエンブリー館を訪れた。しかしフローレンスは、いざ自分の結婚となると素直に母のような生き方を追従するにはこだわりがあった。それは神が自分を必要としており、自分も何か社会的な意義ある仕事をなしとげなければならないという確信にも似た思いであった。

そしてフローレンスは24歳の時、ヘンリー・ニコルソンにプロポーズされたが断り、29歳では多くの点で共通点があり似合いのカップルと周囲も認めていた、リチャード・ムントン・ミルズの申し込みを、迷いに迷ったあげく断っている。しかしミルズはフローレンスの人間性と仕事を評価しており、終生の友人としてナイチンゲールの仕事を支える協力者となった。

年頃のナイチンゲールはおそらく結婚か、仕事か胸の内は千々に乱れたであろう。漠然とした希望は見えてはきたのに、わが進むべき仕事への可能性は暗く、結婚への迷いがなかったわけではなかろう。おまけに両親の期待に添えない悲しみは大きい。「母は私のことですっかり失望している。わたしはそれを感じる時、気が狂いそうになる」と日記に記している。<sup>19</sup>いくらタイプの違う家族であっても、その桎梏から自らを解

き放つには、多くの時間と心の葛藤が必要であった。

— 志は深く静かに燃える —

看護の仕事への傾倒は強まるものの、家族の理解は不可能で、社交用の取り繕った表情の下に悩み深きフローレンスの暗い顔が隠されていた。やっと自分の進むべき道が掴めたのに、どこから一歩進めていくべきか五里霧中で、まだまだ数年間の苦悩が続く。フローレンスのごとく偉大な女性であっても、一個の個人として社会で有意義な仕事をなしたいという自己実現への思いは、その時代と階級では前途多難ないばらの道であった

「そのころ娘が仕事を身につけたいと思っても何もすることはなかった。本当になんにもなかったのである。これは確かなことだった。どんな方面にせよ、女が一生かかって身につける職は何ひとつなかったのである。」看護覚書に記された慨嘆にも似た時代の女性のおかれた状況、ここにフローレンスの深い絶望が表れている。何々夫人、何々家令嬢というわべの女性の肩書、勲章ではない自分の存在価値を確信できる職業につきたい、それは自分にとって看護の仕事しかないという、確信をもったナイチンゲールの悲痛な気持ちが伝わってくるようである。1851年、自分の境遇からナイチンゲール自身が書いたものが、よく世相を表している。「英国の若い女性にとって、必要な仕事不足していることは、皆の心を悩ましている。…（中略）…中流階級では自分が父や兄に煩わしい存在であると感じ、夫を見付けることもなくまた住み込み家庭教師になる教育もうけてははず、途方に暮れている女性がなんと大勢いることだろうか。」<sup>20)</sup>

産業革命による市民社会の発達、それまでの大家族から核家族、家長制から夫婦単位と家族構造を小規模化し、男性が外で賃金を稼ぎ女性は家で家政と育児という役割分担を徹底させる近代家族の特徴を労働者階級、中流階層から徐々に全階層に普及させていた。それにより女性への抑圧、束縛は社会による抑圧と夫からの束縛という二重のものになっていた。まさにナイチンゲールの青春はその二つの圧力への、忍耐強く物静かな闘いとも言えよう。そして看護婦という女性の職業の社会的地位を確立するまでに、まず自分自身をその二重の桎梏から解放するために多くの時間とエネルギーを消耗したのである。

— 最後に勝利する持久戦 —

しかし意志あれば道通ず。説得など不可能である家族に正面から反抗も家出もせず、ひそかに病院関係、内外の看護学校の情報など集め、将来役立つであろう数学や科学の勉強などにこつこつ励み、将来の来るべき機会に備えていた。このような物事への取組方、姿勢はその後のクリミヤの野戦病院での看護体制の改善や、看護学校の創設など重大事を行う時の地味で綿密な計画、時間をかける持久作戦をよく表している。

そのひとつとしてナイチンゲール家の交友関係を生かし、徐々に病院や社会事業において有力な知人の援軍を得ていく戦略がある。ナイチンゲール家に滞在した米国の社会事業家ウード・ハウ博士夫妻には、上流家庭の子女が社会のための職業をもつことは、少しも恥ずべきではないという励ましをもらい、勇気と力を得ることができた。当時ドイツに赴任していたフォン・ブンゼン男爵からは、その時代唯一の看護婦の専門的養成がなされていたドイツのカイザースウェルト学園の看護学校についての情報を得た。それは看護の科学的基礎を学びたいと焦がれていた彼女に、具体的な看護学習得への糸口となった。そしてそこを訪ねる口実としてヨーロッパ旅行を思いつき、それに同行し両親の了解をとってくれるブレースブリッジ夫妻がいる。

そしてそのローマ旅行で、後の陸軍大臣になりクリミア戦争派遣への支援者、陸軍病院の改善に力となるシドニー・ハーバード夫妻と運命的出会いをしている。これらの人々はナイチンゲールのその後の看護の勉強、スクタリの戦場での看護団の仕事、看護学校の設立拡大など、彼女の事業の良き理解者、資金協力者、活動の支援者となった。

引用・注

- 1) 立花隆『宇宙からの生還』中央公論社 1991 によると、宇宙飛行士のうち飛行体験後、宗教家になったり、ある種の超能力が開発されたりする者が多いという。
- 2) 養老猛司『涼しい脳味噌』文芸春秋社 1983 には心と脳の関係の謎が解説されている。
- 3) ヘンリー8世が自分の離婚問題を認めないローマ法王と仲たがいで、1534年カソリックから分派したもので、純然たるプロテスタントとも異なり、儀式形式などカソリックに類似している。

- 4) 『世界の伝記 ナイチンゲール』足沢良子 ぎょうせい 1986 30頁
- 5) 家族病理とは、家族全体のシステムの歪みやアンバランスから生じる症状で、誰かメンバーの鬱病、子供の登校拒否、非行などが一般的である。これを家族の危機としてとらえ、メンバー間のコミュニケーションや情緒の相互作用のダイナミクスを利用して問題解決を図ろうとするのが家族療法で、精神分析とともにアメリカでは1960年代大きな発達を見た。
- 6) ヒルデ・ブルック (アメリカ心理学者) は『籠の中のカナリア』というタイトルで、多くの拒食症の少女の症例を家族病理、文化の弊害として解説している。これは他の多くの精神科医も (S. ミニューチン、H. ビンスワンガー、H. コフト) 同じである。
- 7) (1856-1939) ウイーンのユダヤ人精神科医、20世紀の心理学、精神医学に与えた影響は計り知れない。臨床家として無意識、夢を分析して治療に生かした。『夢判断』1900年『日常生活の精神病理』1901年、『快樂原則の彼岸』1920年など多くの著作を表し、ナチズムの迫害でロンドンに亡命した。
  - 8) レスリー・ワイラー 『ジェーン・アダムス』Silver Burdett Press 1章「世界平和のために」
- 9) ジェーン・アダムス著 柴田善守訳「ハルハウスの20年」岩崎学術出版社 社会福祉学双書 1978 30頁
- 10) 「ハルハウスの20年」 37頁
- 11) 「ハルハウスの20年」 46頁
- 12) 『世界の伝記 ナイチンゲール』ぎょうせい 54頁
- 13) チャールズ・ディッケンズ (Charles Dickens 1812-1870) 19世紀のイギリスの代表的社会派作家で当時のイギリス救貧法の代表的貧困者施設ワークハウスの模様を描いた『オリバーツイスト』、吝嗇家のスクルージーがクリスマスの前夜に見た夢で、貧しい子供達への慈善に開眼する『クリスマスキャロル』など多くの作品で、人々に富の不公平さと社会改革を訴えた。
- 14) ナイチンゲール「看護覚書」薄井坦子他訳 現代社 1983 212頁
- 15) 「女性による陸軍病院の看護」『ナイチンゲール著作集』現代社 第2巻 1977
- 16) シャロット・ブロンテ (1816-1855) の1847年の作品で、薄幸の孤児ジェーン・エアーが家庭教師として住み込んだ主人と恋に落ちて結婚した後の悲劇を描いた。ブロンテ姉妹はアイルランドの牧師の3人姉妹の末娘でヨークシャーで育ち、その風土を舞台に教師をしながら、姉たちと共に多くの詩や小説を書いた。姉のエミリは同年に『嵐が丘』を書いている。
- 17) ルイ・ザ・メイ・オルコット (Louisa May Alcott 1832-1870) の1868年の作品で、南北戦争時期の中流階級の4姉妹の生き方を描いた自伝的小説。次女の小説家希望のジョーは作者本人であり、家庭教師をしながら小説を投稿している。オルコット自身南北戦争では、看護婦となり戦場の記事を通信社に送った。
- 18) カナダのプリンスエドワード島の風景と住民の生活を引っ取られてきた孤児アン視点から描いている。作者モンゴメリー自身がモデルであるこのアンは、優秀で町の寄宿学校の教師となるが、育った村にかえって家庭生活を営んだその生涯を描いた。
- 19) 『世界の伝記 ナイチンゲール』ぎょうせい 92頁
- 20) 「カイゼルスウェルト学園によせて」『ナイチンゲール著作集』 1977